

FIVE VALUE ASSET

Monthly Newsletter

5 バリュース通信 Vol.14

Date of issue: 2025.12.15

平素よりお世話になっております。5 バリュースセットでございます。今月もマンスリーレターとして5 バリュース通信をお届けいたします。マーケットニュースのご案内の他に、時事に関するコラムなどを月に1回お届けいたします。お楽しみいただけますと幸いです。

Interview メンバーの言葉



ファイナンシャルアドバイザー

鳴海 千春

皆さまはじめまして。今年の9月より5 バリュースセットに入社いたしました、鳴海千春と申します。前職の日系証券会社では営業を中心に様々な業務に携わってまいりました。5 バリュースセットに入社後は、外国債券を中心にお客さまとお取引させていただいております。

私は米ドルやユーロなどの動きを分析することに関心があり、その考察をお客さまと共有しながら最適な外国債券の提案につなげていくことに大きなやりがいを感じています。

また、当社が掲げる5つの理念の中で、私が最も大切にしていきたいのは「誠実さ」です。熱意や能力はもちろん重要ですが、ウェルスマネジメントの根幹はお客さまの信頼に真摯に応える姿勢だと考えています。

初心を忘れず、誠実に向き合うことで、より良い価値提供をしていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

Topics 今月のトピックス

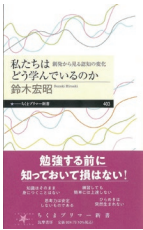


12 Dec 2025

- Book Review
- Seasonal bonuses!!
- Impressions of seminar



- ・ 鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか』
- ・ ボーナス !!
- ・ 第9回オフサイトセミナーの感想 (2)



鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか: 創発から見る認知の変化』(2022, 筑摩書房)

東京大学大学院単位取得退学。博士(教育学)。東京工業大学助手、エジンバラ大学客員研究員を経て、青山学院大学教授。認知科学が研究領域であり、特に思考、学習における創発過程に関する研究を行い、日本の認知科学研究の第一世代を牽引。日本認知科学会では2013年から2年間、会長を務めた。単著に『認知バイアス 心に潜むふしぎな動き』(2010, 講談社)、『類似と思考 改訂版』(2010, 筑摩書房)など。

『私たちはどう学んでいるのか: 創発から見る認知の変化』(2022, 筑摩書房)は、頭の中ではぼんやりと理解していてもうまく言葉にできない物事を説明され納得や理解ができたとき、あるいは「ひらめき」が発生した時のすっきりとした感覚(かつて読んだ本では「頭の底が抜ける」と表現されたと記憶しています)など、認知やひらめきの構造をテーマにした新書本です。

本書では、人の変化全般を指す「認知的変化」(「学習」や「学び」と同義)、「無意識的なメカニズム」、「創発」(無意識に生じる発見や創造)という3つのキーワードを軸にしながら、「能力」や「知識」といった言葉にまつわるイメージなどが、エビデンスに基づき解きほぐされていきます。一見すると堅苦しく哲学的な内容に思えるかもしれませんが、本書は抽象的な用語や理論などはあまり登場せず、「知識」の構築過程や練習・反復効果などを図式で補いながら、モデル化を通じて明瞭に論じられていきます。

注目すべきは、知識は習得や伝達するものではなく、認知的なリソース(資源)と環境・状況のリソースや関係性から絶えず生じる「コト」であるという指摘です。「コト」は所持・譲渡可能な「モノ」ではないことを意味し、一般的に「モノ」としてイメージされがちな「知識」は、「記憶」や「情報」である(第2章)とされます。日常の場面では、行動の際に状況の要請や目的の遂行の為に蓄積された「記憶」「情報」を駆使する試みが生じ、何らかの作品を批評する時に、個々人に蓄積されたリソースを基にして知識が生じるということが、例にあげられます。

特に興味を惹かれたのはひらめきに関する分析(第5章)で、入浴中のアルキメデスが発した「Eureka!」という言葉で馴染みの深い現象について、グレアム・ウォーラスが提唱した「インバス(準備/行き詰まり)」、「インキュベーション(孵化を促すため)」、「ひらめき」、「検証」という4段階を基に論じられるという部分です。

認知に関する調査(パズルや穴埋めクイズ)などを基に、鈴木宏昭さんはインバス段階で悪戦苦闘している内に、学習成果として無意識にひらめきの芽が生じるのだが、意識の働きが鈍い(ボンクラ)であるため「無意識システムが学習を重ね、相当程度までよい配置のパターンを作り出す。すると意識システムもそれに気付く。そして『わかった』と叫んで、成功を横取りしているのだ。だからひらめきが突然訪れたかのような印象が生み出されるのは、意識システムがボンクラであることから生み出される錯覚なのだ」(129頁)と指摘され、ひらめきは何もないところに突然生じる啓示的なものではなく、思考の多様性や身体を用いた行動による環境への働きかけや、相互作用を通じた複数の認知リソースの利用という段階を経て生じるものとまとめられます。

本書では取り上げられていませんが、サウナやウォーキングなどでひらめきが起こる原因は脳疲労状態といわれており、ひらめきはリソースの蓄積を基に発生する「錯覚」という指摘を踏まえると、脳疲労が無意識の部分にあるひらめきの芽を認知させ、ひらめきを錯覚させている(その際に知識が生じている)とも推察できます。

最終章である第6章は、認知や練習・反復などがもたらす効果を教育にどう援用するかが論じられるため、「うまく言葉にできない物事」を言語化する思考のレッスンよりも提言的な内容が強くなります。それゆえ、個々の関心によってはそれまでの章に比べ冗長に感じるかもしれません。とはいえ文量もさほど多くなく、初読時は短時間でスムーズに読める内容なので、認知や学びの構造や、物事の相互作用がもたらす効果に興味関心のある方は、ぜひ一読をおすすめします。

師走に入り、今秋世間を震撼させたクマ出没関連のニュースがピークアウトした感があります。ようやく冬眠に入ったのか、はたまた人間が警戒、あるいは寒くて山に入らなくなったからなのかは定かではありませんが、いずれにせよクマさんには春までゆっくり寝んねしてもらいたいものです。他方、我々人間は春まで寝ている訳には参りません。寒風吹きすさぶ中、働き続けるのでございます。そんな世知辛い年の瀬ですが、多くの勤め人にとって嬉しいこともあります。そう「ボーナス（賞与）」です。日本では6月と12月の年2回ボーナスを支給する企業、官公庁が圧倒的に多く、半ば風物詩となっています。今年最後の本稿ではこの「ボーナス」のトリヴィアをご紹介しますと思います。

「ボーナス（bonus）」の語源は、ラテン語の「ボヌス（bonus）」で、ローマ神話に登場する成功と収穫の神「ボヌス・エヴェントス（Bonus Eventus）」からきており「良い」を意味するそうです。仏語の「ボン（bon）」や伊語の「ボーノ（buono）」の語源でもあります。



さて日本における「ボーナス（賞与）」ですが、「後払いで支給される一時金」なものがほぼ確約して年2回受け取れる、というのは世界的に見てかなり稀なシステムのように見えます。国や業種・職種によって異なりますが、海外では業績連動型（インセンティブ）で年1回、支給日も企業の決算明けが多いように見えます。この業績連動型の場合は、成果が上がらなければ支給はされず、ほぼ確約した一時金といったものではありません。やや強引な例えですが、株式の配当金に近い性格ではないでしょうか。業績堅調で増配もあれば、無配転落もあり得るといったところです。一方日本のそれは、これまた強引ですが、債券の利息に近いと言えるのかも知れません。

もっとも海外でもほぼ確約して支給される「ボーナス」も存在しています。例えばインドネシアでは、労働法で「レバラン手当」が定められており、イスラムの断食明けのお祭りレバラン（時期は年によって異なる）の前に給料の1カ月分が支給されます。ちなみにイスラム教徒でなくても一律貰えるそうです。イタリアやフィリピンでも法律で義務付けられた「13カ月手当」というものがあり、12月に給料の1カ月分が支給されます。こちらはキリスト教徒が多いのでクリスマス時期の経済支援が目的だそうです。イタリアでは年金受給者も1カ月分余分に支給されるため「トレディチェシマ（tredicesima：13番目の意）」は12月の風物詩となっています。

では、レバランやクリスマスといった宗教的なイベントではなく、日本の「ボーナス」支給が6月と12月に集中しているのは何故なのでしょう？これは江戸時代の商家における慣習「藪入り^{やぶ}」に端を発するようです。当時の商家の住込み奉公人は働き詰めで、休みは旧暦の1月15日（小正月）と7月15日（お盆）しかなかったのですが、その両日は実家に帰ることが許されました。これを「藪入り」とよび、商家の主は「藪入り」前に、夏は「氷代」、暮れは「餅代」として包み金を渡し、実家に帰るのだから身綺麗にと着物履物を与えました。いわゆる「お仕着せ」です。これら「藪入り」前の年2回の現金・現物支給が今日の6月、12月の「ボーナス」支給の祖となっているようなのです。週休2日が当たり前の現代の私共にとって、年休2日とは本当に恐れ入ります。有名無名の商家の先人達に深い尊敬と感謝の意を表する次第です。

今年も残すところあと僅かとなりました。本年も弊社5バリューアセット並びに本5バリュー通信にお付き合いいただき、誠にありがとうございました。どうか皆さまにより大きな「ボヌス（bonus）」が訪れますようお祈り申し上げ、筆をおきたいと思います。良い年をお迎えください。

Impressions of seminar 第9回オフサイトセミナー感想(2)

当社では週例ミーティング後、勉強会の一環として5バリュー発表と題した持ち回りの発表を行っています。前号に続き、2025年9月に開催された第9回オフサイトセミナー「文学から『お陰さま』を学ぶ～なぜ今、文学なのか～」（講師：仁平千香子先生：文筆家、フリースクール東京y's Be学園実学講師）についての感想をテーマに行った発表の中から内容の一部をご紹介します。



芥川龍之介の「蜜柑」で示された「見る私」は偏った存在であるということを普段から認識し、見えている世界は客観的なものであるという専断を避け、お客様との関係性においても自己の主観にとらわれることなく、「間」を意識しながら対応すべきではと考えます。「間」を意識した言動はお客様からの共感を獲得しやすく、その共感性が私たちの「誠実さ」という評価に繋がっていくと考えます。文学作品に触れることで発見する「気づき」は、私たちが仕事をしていく際にも多くあるようなものとも、今回のセミナーで感じました。

（青野 純一良 社長室長）

証券業界を見ると、ひとつの情報だけで端的な結果を求めがちであるため、お任せ商品が目立やすいと感じています。債券は時間をかけて収益を確実に積み上げていける金融商品であり、売り買いで儲けた・損したと白黒をつける商品ではないため面白味に欠けるかもしれませんが、私たちには債券の良さをお客様にきちんと紹介できるという強みがあり、債券を通してお客様と会話をする中で、信頼関係を築けていけるのではないかと考えました。

（鐘ヶ江 伸 チーフ・マーケティング&プロダクトオフィ

点と点の情報ではなく、流れ・物語を通してしか、人間と社会についてわからないことが多いという仁平先生の指摘で、楠木健さんの『ストーリーとしての競争戦略』（2010）を思い出しました。同書では「競争戦略の神髄は、思わず人に話したくてたまらなくなるような、面白いストーリーにある」ということが述べられています。マーケットの考察においても思わず人に話したくなるような物語を考えながら日々の営業活動をしていきたいと、今回のオフサイトセミナーを通じて感じました。

（鳴海 千春 ファインナンシャルアドバイザー）

今回のセミナーは文学の魅力や、行間を読む力、言葉の裏にある意味を掴む力について、たくさんの学びがあり、スペイン語を母語とする私にとって、日本語と文学の世界に触れることはとても興味深い体験でした。日本語における行間を読むという能力は世界的に見ても高度なコミュニケーションであり大きな強みになりますし、行間を読むという能力は私たちの債券ビジネスにおいても重要なものと感じています。

（ロベス・ベニエル ジュニア・マーケット&プロダクトオフィサー）

文学を読むことで共感力や想像力を鍛え、今自分に与えられている日常に意識を向け、平凡な日常から「ないもの探し」ではなく、「あるもの探し」を行うことで、たくさんの「お陰さま」に気づき、日常や周囲にも感謝の気持ちが生まれてくると考えます。ビジネスにおいても、お客様や会社のメンバーが、いま何が必要で、求めているものは何かということを、コミュニケーションを取り、想像力を働かせながら考え、依頼されたものだけの対応ではなく+αの情報提供や、気配りのあるサポートを心がけていきたいと思えます。

（根本 晴美 営業アシスタント）



5Value Asset Co., Ltd.



5バリューアセット株式会社 金融商品仲介事業者 近畿財務局長（金仲）第437号

各商品等にご投資いただく際には商品毎に所定の手数料や諸経費等をご負担いただく場合があります。又、各商品等には価格の変動等による損失を生じる恐れがあります。各商品等へのご投資にかかる手数料等およびリスクについては、当該商品等の契約締結前交付書面、目論見書、お客様向け資料等をよくお読みになり内容について十分にご理解ください。

この通信は、当社ホームページに掲載するほか、当社セミナーにご参加いただいた方、業務提携をいただいた方、およびIFA口座をお申し込みいただいた方に送付しております。送付の停止・送付先変更をご希望の場合は、大変お手数ですが下記のメールにご連絡ください。送付の停止・送付先変更には、少々お時間をいただく場合がございます。

発信者：5バリューアセット株式会社 クライアント・リレーション

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1 丸の内永楽ビル20F

newsletter@5valueasset.com